

# 四国遍路の巡礼路の景観の特徴

稲田道彦

## 1 はじめに

遍路にとって景観とはどういう意味のある場所か、考えてみたいという気持ちが今回の発表のテーマの根底にあります。四国遍路は88の寺院を参詣する巡礼であると、誰もが疑問をいだかない決まり事です。実際に、自分で遍路行を終えて、88の寺院に参詣して感銘を受けた寺院もあるが、多くはなぜこの寺院が札所に入れられているのだろうか、考えることがある寺院もあったように思います。本当に寺院を回ることが四国遍路という巡礼の目的なのだろうか、そうであれば明瞭に遍路がこの旅の目的が理解できるように、88の寺院に於いて、暗示されていても良いと思っていました。もっと言うと、自分の中では88の寺院が、巡礼者にとっての聖地なのだろうか、考えることが多かったようです。なぜ遍路が四国を巡礼するのかという疑問に対して自分で考えた解答の一つが、寺院を含めてその背後にある景観にあるのではないかという仮説を抱きました。巡礼は巡礼者が“いわゆる聖地”を回りながら、その過程で精神的な成長をとげると考えられている行動です。その聖地という場所が、四国遍路の議論の中でもっと正面から議論されてもよいし、私が専攻している地理学の延長上にある問題ではないかと考えています。

私は30年近く、四国に住んでいます。遍路が詣る寺院も、通行するいわゆる遍路道も、私の生活圏には包含されています。しかも四国での日々の生活の中には寺院にも行きます。参拝もします。でもそこから、悟りのような感覚を得たことはありません。でも、たった40数日四国を歩いた人が、悟りのような、達観した人生観を得たとその手記に表すことがたくさんあります。一体何が、彼らにそういう感慨を得させるのでしょうか？“きっと、住んでいる人には分からない、歩いているときに目にする、又は体験する、四国の景観がそれを可能にしているのではないだろうか”と考えました。これは実際に自分が歩いてみて、四国の景観がどのような形で遍路に、悟りの形成に影響を与えるのか、体験してみました。この発表は、私という遍路が出会う景観という面での、仮説を並べるような形で提示しています。

## 2 景観について

本発表では、景観にたいする考え方を2分類しました。自然景観と人文景観です。自然景観は、景色を写真のようにある風景を時間断面で固定したものであると考えます。また、目という器官が切り取り、脳に保存される映像です。歴史的な経過のもとに形成されてきた、山や岩や、町や寺といった、具体的に遍路の眼前に展開する景色そのものです。その目に映った景色を人がどういう風を感じるのかと言うことを人文景観と名付けました。ここで分析するときの人文景観には、その景色の中に映っている人の気持ちを考え、またその景色を見つめている人の気持ちを主体的な考え方と定義しています。人文景観は多くの人に共通しているコード（それを理解・解釈・価値付けする思考の径路ともいう側面があります）もあるでしょうし、他の人とは一致しない非常に個性的なコードもあると思われます。この集団と個という差異にある、個人の認識の仕方の差異の問題の客観的な分析は、後日に回すとして、ここでは私個人の目に映った景観を分析の対象

とします。

### 3 一般的に聖地とは次のような性格を有している場所と考えています。

- その場所が聖地であることを訪れる人に、理性又は感性に訴えることにより納得させる場所
- その場所にだけ備わっている性質を持ち、他の場所で代替できない聖なる特徴を持つ
- では聖なる土地の特徴とは？

この世ではない異界を表象する内容（景観・寓話・そこでの経験）を持つことではないだろうか。

特異な伝説や歴史的な事件がいまだに現代人の生活に影響を及ぼしている場所。

特異な自然物が存在している場所。

聖地を訪れた人に不思議な気持ちという感情を呼び起こす場所

この枠組みの中で四国遍路の聖地を考えてみたいと思っています。

### 4 四国遍路のである聖地

四国八十八ヶ所のうちで場所のどういう性質が聖地として認められるのでしょうか？具体的な景観の中で、遍路道の中に存在する聖地を考えてみます。

まず①寺院を考えることにします。寺院の中で何が大切なのでしょう。宗教的には、その寺院の中心の本尊でしょう。遍路が参詣して、最もその存在を身近に感じたいのは本尊だと思います。しかし、その本尊を間近に拝める寺があるのでしょうか。私の経験で、実際に本尊を拝めたのはたった2ヶ寺でした。遍路は多くは締め切られた扉の外から、中にその存在を信じて礼拝して、次の寺院に進みます。すべてが閉じこめられ、私は建物を拝んでいるのだと思っていました。寺院での参拝では、本尊が中にいるものとして、拝むという方式が参拝のすべてであると言い切ってしまうとそれで終わりですが。たとえば京都の寺院の参拝の方式とのあまりにも大きい違いに驚きました。アジアの仏教寺院とも全く違っています。私には、まるで遍路の頭の中に曼荼羅を描くように、それぞれの仏像と寺院を配置しながら、巡礼をする事が求められているのであろうかと思いました。これが自在にできるほど、多くの遍路が宗教的素養を持っている人ばかりには思えません。四国遍路を行っていて、本尊を拝めないことは、私にとって、この巡礼を試されているようで、不可思議な経験でした。この理由で、寺院が聖地であるとは決して、私のような一遍路には思えませんでした。

次に②巡礼路を考えます。私には歩く道が聖地と思えました。自分の歩く道が巡礼路となるので、歴史的に正確なとされる道すじを重んじるよりも、自分が歩かねばならない道、自分が歩きたい道を遍路道であると考えました。歩きながら、日々のお会いに応じて、沿線の人との対話をするようになります。遍路にとっては、嫌な人とは通り過ぎればいいので、基本的に都合の良い、親切な、いい人とばかり会うことになりました。沿線の人には接待という特別な習俗の心を持って遍路をもてなしてくださるので、基本的に善意にあふれた人と接することになりました。小さな存在である自分を社会は決して見捨てていないんだと痛感しました。等身大の自分を正当に評価してくれているという感情でした。毎日毎日規則的な、主に歩く運動を繰り返しながら、心身とも健康な気持ちになりました。肉体運動の点では難行苦行と思えることも多々ありました。規則的な運動は個人の身体の反応を高め、ともに適度の疲労感と充実感をもたらしたようです。このことは遍路の思考をポジティブな方向に遍路を導いてくれます。遍路は基本的に単独行です。この世の中で、自分が頼るのは自分1人であることを思い知ります。道々自分自身との対話を繰り返しながら、巡礼し

ます。そして善意あふれる他者が、等身大の自分と同じような他者が、自分がそうであるように社会にあふれていることを知るのだと思います。この気持ちは自分のこの旅に弘法大師と一緒にいてくれるという気持ちにも通じるのではないかと考えました。遍路は自分の周囲にある社会に、多くの善意の人がいて、その気持ちを背後に感じながら、巡礼することになるようです。

私にとっては③特異な自然景観が自分が今「不思議の国」を歩いているんだと思わせました。そのことは今までの社会とも文化とも違う国なので、人間という原点に還って、自分の生活を見直すことにも繋がりました。社会的には全く自由の国を羽ばたいているという想像が自分の中であふれていました。

その中でも異界に入国したことを実感できる世界として盆地の景観を一例に挙げます。地図で示したのは高知県の窪川周辺です。窪川へは何時間もかけて急坂を登り、峠を越えると、下りはなくそこは平地でありました。進むうちに水田が出現し、農村が展開しました。小さな集落には日々の堅実な生活が色濃く伺えました。もう少し行くと、町があり、その中に札所となる寺院がありました。集落や町では、小さな社会が整然と営まれている印象を受けました。寺院から水田地帯を抜けると急な下り坂が雑木林の中にあり、それを下ります。そして坂を歩いていたと同じ、もとの海岸に沿う遍路道の景観に戻りました。あとから振り返ってみますと、あの山上に展開していた、小さな社会は異界ではなかったのかという想像すらさそいました。これは37番岩本寺付近で私が強く感じたことでした。同じく盆地では愛媛県の久万盆地で、盆地に入る前は水田中心の農業が、山の斜面の畑作が多くみられる盆地に入り、しかもふかしたサツマイモを接待してもらい、農業の生産様式の違うことを思い知りました。生産生活の違うことはひいては人々の考え方が違うのではないかという連想を生み、生活様式が違ってもおかしくないという連想へと繋がりました。このことは、異界へ入ったのではないかとの気持ちを強くしました。

自然の違いにも遍路の生活は敏感でした。落葉広葉樹の自然植生の四国北部に対して、高知県の南部では照葉樹林帯に属します。樹木は亜熱帯とも言っているいい景観を出現します。景色は違っています。山の樹木の密度や、樹高、緑色の濃さなど、歩いていて、自分たちが暮らした世界とは全く違う世界を感じました。この違いはきっと、別種の国（社会）であることを容易に想像させました。こういう意味で、自然の世界からも、異界を連想させる要素が遍路の行程にはちりばめられているようです。

そのほかに、景観的な要素が大きく意味を持っていた古い神道の景観的な要素も付け加えられているのではないかと考えました。たとえば、焼山寺・岩屋寺・八栗寺の背後にある岩山です。禅師峯寺の岩の庭には古い神社の神体と考えられてきた岩の磐座（イワクラ）に似た佇まいを想像しました。滝や洞窟の存在も別世界を連想させますし、現在の遍路は立ち寄ることが少なくなりましたが洞窟も遍路の景観の重要な聖地の要素であったのではないかと想像できます。中国起源の道教の考え方も聖地として取り入れられたのではないのでしょうか。万物を生み出す根元の陰と陽その象徴としての男根（岩峰）と女陰（洞窟・岩の割れ目・深い谷）、また神仙郷（山中他界、壺中世界、桃源郷）としての、別世界を各地に探す動きもあったのではないのでしょうか。私はその世界を盆地の中に十分発見してしまいました。

## 6 まとめ

このように考えてきますと、八十八の寺院だけではなく、四国遍路の巡礼の舞台設定として、自然景観の特徴をうまく取り入れているのではないかとの想像をかき立てられます。ここではまだ私がこう考えているという仮説の段階ですが、さらにこの研究を進めていきたいと考えています。